

前回私たちは、アテネにおけるパウロの宣教について見ました。アテネの人々は、実に多くの偶像を拝んでいましたが、そんな彼らに対してパウロは、彼らが「知らずに拝んでいる神」こそ、自分の宣べ伝えている神であり、この方は「天地の主」であると告げました。そして、彼らに悔い改めを迫ったのです。それは神様が、ご自分のお立てになったひとりの人（主イエス）により義をもって、この世界をさばく日を定めておられるからで、主を信じる者がみな、さばきではなく赦しを、滅びではなく、永遠のいのちを得るためでした。

このパウロのことばを聞いて信じた人は、決して多くはありませんでした。主イエスとその復活に対するアテネの人々のリアクションは、あざ笑ったり、「またいつか聞くことにする」と言っ、聞き流すというものでした。けれども、そのような中でも、主は、確かにみことばを聞いて、信仰に入る人々を起こされたのです。その後、パウロは、アテネを去って、コリントに向かいます。🗺️前の地図を見て下さい。

コリントは、アテネの西約70キロにあるアカヤ州の州都で、商業貿易の盛んな港町でした。小アジアの港町とイタリアを結ぶ地形に位置していたため、旅行者も多く、風紀も乱れがちであったといわれます。例えば、「コリント風に振舞う」といった時、それは「不品行」を意味していた、といったようにです。1-3節にあるように、パウロは、ここでアクラとプリスキラというユダヤ人夫婦に出会います。そして、彼らとともに住み、ともに天幕作りの仕事をするのです。彼らの名前は、他の箇所にも出てきますので、パウロにとって彼らが大切な存在となったことがわかります。

では、そのような出会いは、どのようにして与えられたのか、というと、2節の途中にこうあります。「クラウデオ帝（AD41-54）が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令（AD49）したため、近ごろイタリアから来ていたのである」。彼らは自分の意思ではなく、ローマ皇帝に強いられることで、そこを去り、コリントに来ていました。もしそのようなことが、もし今のアメリカで起こったら、どうですか？

かつて第二次大戦時に、日系人たちは強制的にキャンプ場へと追いやられましたが、私たちもアメリカから強制的に退去を命じられたら、どうでしょう？そのような経験は、喜ばしいものでないばかりか、人々のうちに苦い思いを残すと思うのです。けれども神様は、そのような中からも良いものを生み出されます。そのことを通して、パウロはこのコリントでアクラとプリスキラの夫婦に出会うことができたのです。そして、ともに天幕作りの仕事に励んだだけでなく、宣教のわざにも励みました。

4-5節「パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人とギリシヤ人を承服させようとした。5 そして、シラスとテモテがマケドニヤから下って来ると、パウロはみことばを教えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちにはっきりと宣言した」。

パウロは、天幕作りをしている間は、安息日ごとに会堂で論じていました。でも、シラスとテモテが合流してからは、みことばを教えることに専念するのです。それは彼らがピリピから援助物資（ピリ4:15）を携えてきたからだと思われます。ちなみに、このコリントでのシラスとテモテの合流は、一度、彼らがアテネで合流した後に、テモテは再びテサロニケへ（Iテサ3:1-3）、シラスはアケドニヤのどこか（おそらくピリピ）に行った後の再合流であったようです。ですから、それなりの時間が経っていたことが考えられます。

話を戻しますが、パウロをして、コリントのユダヤ人たちに「イエスがキリストである」と宣言した結果はどうだったか？6-8節「しかし、彼らが反抗して暴言を吐いたので、パウロは着物を振り払って、『あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけ。私には責任がない。今から私は異邦人のほうに行く』と言った。7 そして、そこを去って、神を敬うテテオ・ユストという人の家に行った。その家は会堂の隣であった。8 会堂管理者クリスポは、一家をあけて主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた」

残念なことに、ここでもユダヤ人たちは、パウロに反抗し、暴言を吐きました。そこでパウロは、彼らのいのちに関する責任が自分がないこと、また、これからは異邦人のほうに行くことを彼らに告げるのです。とても緊張した場面ですが、私たちがここで見過ごしたくないのは、同胞ユダヤ人たちに対するパウロの思いです。

パウロは決してユダヤ人たちをひとくくりにして、彼らを憎んだり、敵対視することはありませんでした。彼らの中の一人でも信じて救われるために、会堂のある町では会堂でみことばを語り続けたのです。ですから、パウロは、自分が異邦人のために立てられた使徒であることを十分承知しながらも、同時に、同胞の救いのために祈り、彼らにみことばを語ることを続けました。

そして、みことばを語る時、ユダヤ人たちがどのような応答をするかも彼は知っていたのです。もちろん、中には信じる者もいましたが、多くの場合、ユダヤ人たちは主を信じないだけでなく、パウロに対して嫉みに燃え、悪態をつくことを彼は十分承知していました。かつての自分がそうであったようにです。それでも、彼はユダヤ人にも、異邦人にもみことばを語り続けました。それがあっての8節が続くのです。「会堂管理者クリスポは、一家をあげて主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた」。

ところが、その後、パウロは再び主からの幻を見ます。以前の時は、主からの幻によってパウロと一行は、小アジアからアケドニヤに渡る決心へと導かれたわけですが、今回は、それを通して、パウロがコリントに長く滞在する方へと導かれるのです。9-10節「ある夜、主は幻によってパウロに、『恐れなさい、語り続けなさい。黙ってはいけません。10 わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなただけを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから』と言われた」。

この幻を見た結果、パウロは、一年半、コリントに腰を据えて、みことばを教え続けるのです。でも、もしそれが単に長期滞在を促すためのものであったなら、なぜ神様は「恐れなさい、語り続けなさい」とパウロに語られたのでしょうか？なぜそこで「だれもあなただけを襲って、危害を加える者はない」という必要があったのでしょうか？パウロのうちに恐れがあったからです。そして、その恐れが、襲われ、危害を受けることと関連していたからです。そうでなければ、あえてそのように語られる必要はありません。

では、どうですか？このようにいうと、「いや、パウロには、そんな恐れはなかった」と言う方もおられると思います。信仰者は、特にリーダー的な立場にある人は、信仰のゆえに、恐れがないかのように考える人もいますが、誰もが恐れをもっているのです。パウロは、このコリントの人々にあてた最初の手紙の中でこう語っています。Ⅰコリ 2:3「あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました」。また、その後に書かれた第二の手紙では、これまで受けてきた苦難と迫害の数々をあげた後にこう言うのです。

Ⅱコリ 11:28-30「このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。29 だれかが弱くて、私が弱くない、ということがあるでしょうか。だれかがつまずいていて、私の心が激しく痛まないでおられませんか。30 もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります」。

皆さん、パウロは「自分には弱さがない」と言っていますか？「どんなことがあっても、自分の心は痛まない」と言っていますか？私たちがあらゆる時に弱さを抱え、恐れを持つように、パウロもそれらを抱えていました。でもその弱さの中でこそ、キリストの力によって完全に覆われることを知っていたので、「自分の弱さを誇る」と彼は言ったのです。ですから、パウロは、彼自身のためにも、また彼を通してみことばを聞く人々のためにも、つまり、主がこの町にたくさんいると言われた「わたし（神）の民」のためにも、主からこのように語られる必要がありました。「主がともにおられること」をリマインドされる必要があったのです。

主からの幻というのは、パウロであっても、いつも見ていたわけではないと思います。少なくとも、聖書にはそのように記されていません。でも神の民が、主の御心を求めて祈る時、主はそれを示すための方法の一つとして確かに幻を与えられたのです。当たり前のことですが、その内容は、トロアスの時も、このコリントの時も、人々の救いと深く関連しています。そして、そのことが、みことばを語ることで、迫害や苦難が待っていることを知りつつも、パウロにそれを続けさせた理由と言えるでしょう。

いかがでしょうか？「幻を見た」というと、そこには思い込みや勘違いも含まれるので、私たちはあまり口にしないと思います。でも、あなたは主からの幻を見たことがありますか？たとえそれが幻ではなくとも、あなたの家族や友人知人といった人々の救いに対する確信を、みことばや祈りを通して与えられたことがありますか？それゆえに、あなたとしては苦難が待っていることが予想される中に、主を証したことはありますか？

みことばを語ることで、人々から拒絶され、無視され、馬鹿にされ、悪口を浴びせられ、暴力を振るわれることなどを考えると、だれもが恐れを抱くと思うのです。それゆえに、人々の気に触らないように、罪やさばき、地獄や滅びといった言葉は避け、当たり障りのないことを語ろうとするのが、私たちではないでしょうか？でも、そのことのゆえに、あなたの愛する人を含む人々が、主の福音を聞くことなく、それゆえに悔い改める機会も得られず、主のさばきによって永遠の滅びに至るとしたら、どうですか？あなたは知らん顔できますか？「自分さえ主を信じて救われていたら、それでいい」と言えますか？

なぜ私たちは恐れるのでしょうか？なぜみことばを語り続けるよりも、黙ってしまおうとするのでしょうか？ヨハネ第一 4:18「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです」。私たちが恐れる理由、それは私のうちで愛が完全なものとなっていないからです。つまり、他の人に対する関心のなさ、愛の欠如のゆえに、私たちのうちで恐れが勝ってしまうのです。もっと言うと、神様ではなく、神様が愛される人々でもなく、自分自身を愛しているゆえに、「自分は傷つきたくない。リスクは負いたくない」といって私たちは語らないのです。

でも、主は「愛には恐れがない」と言われます。「全き愛（完全な愛）は、恐れを締め出す」と。そのような愛は、どこから得られますか？それは私たちのうちから勝手に湧き出てくるものですか？いいえ。全き愛、それは主イエスだけがもっておられるものであり、この方からのみ受けられるものです。そして、それこそが、主イエスをして、自分勝手に、自分しか愛さない私たち罪人のために、十字架にかかり、その身代わりの死をもって私たちに明らかにして下さった神の愛、自己を犠牲にしてまで、他者を大切にす完全な愛です。

主イエスを信じるすべての者には、今日その愛が聖霊を通して注がれています。私たちの方で、その愛を拒むことさえなければ、主は、今もその愛をもって私たちに満たして下さるのです。そして、その愛に満たされるなら、私たちには、この世を超えた天の御国に対する希望が与えられ、その永遠の希望のゆえに、この世で主と福音のために損することがあっても、苦しむこと、さらにはいのちを失うことがあっても私は大丈夫だ、という確信をもつことができます。それらがすべて主イエスの許に私たちを導いて(近づけて)くれるからです。

あなたは恐れずに、みことばを語り続けていますか？あなたの救いの君である主イエスのことを証しておられますか？主を証するのに、恐れがなくなるのを待っていたら、いつまで経ってもできません。その恐れがある中で、その恐れを認め、それを主にゆだねる時に、主がご自身の愛で、その全き愛であなたを満たし、恐れを締め出して下さるのです。そのようにして、主はパウロと共におられることで、パウロはみことばを語り続けたように、私たちも、主に従う中で主がともにおられること、主のすばらしさをいよいよ味わい知るようになります。恐れずに、語り続けようではありませんか。